1994年10月15日発行　1975年2月28日第3種郵便物認可
毎月1回15日発行
定価／150円
年間購読料／2,000円（送料共）

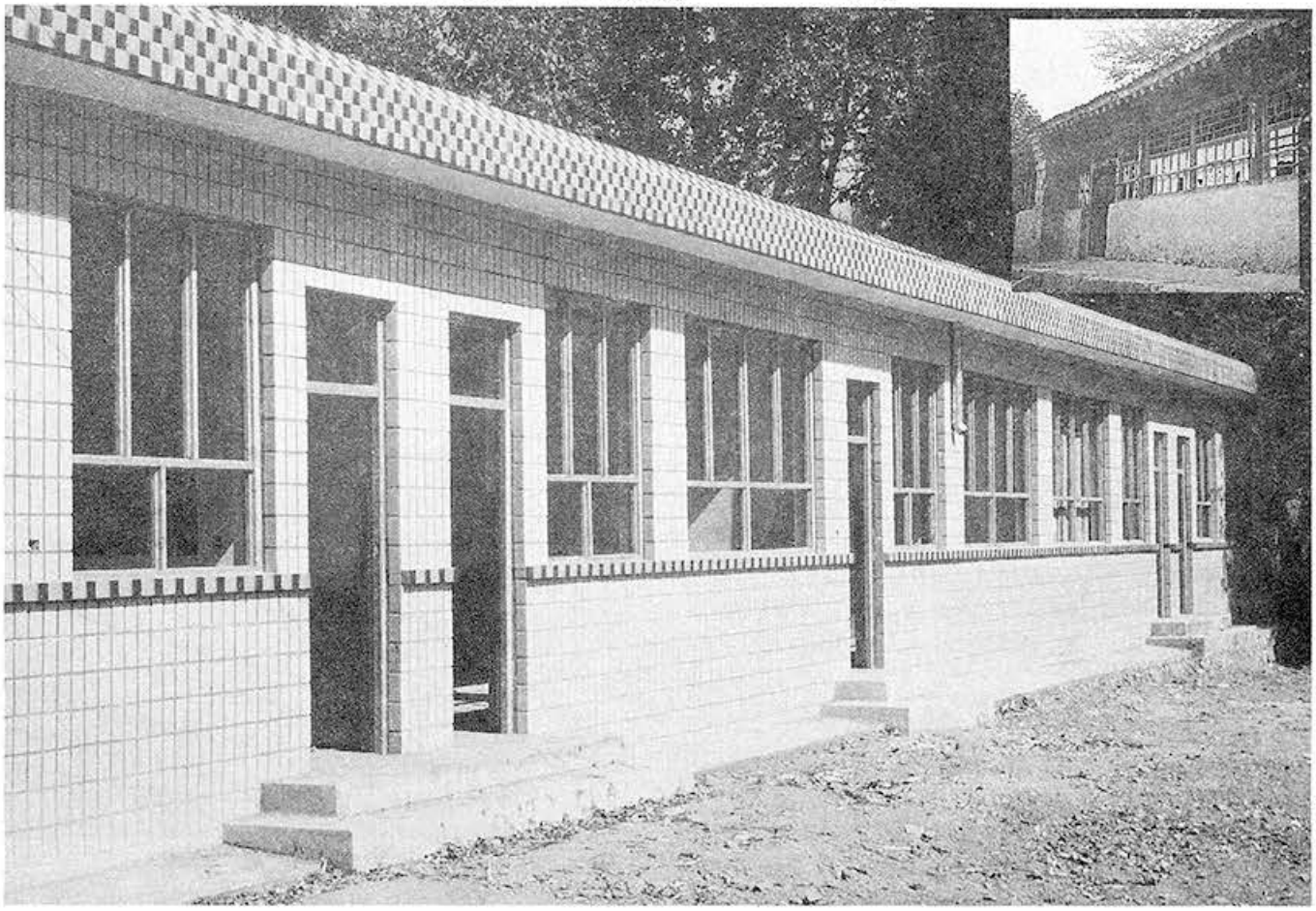
編集／緑の地球ネットワーク
Green Earth Network

大阪市港区市岡元町3丁目9-16　西建ビル（〒552）
Tel. 06-583-1719　Fax. 06-583-1739
郵便振替　00940-2-128465（大阪4-128465）
COM21 通巻324号　発行/COM企画室

緑の地球
GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

●夏のワーキングツアー日誌より …… P 2
●楽しかったアイヌモシリ …… P 4
●ネットワーク『地球村』 …… P 8

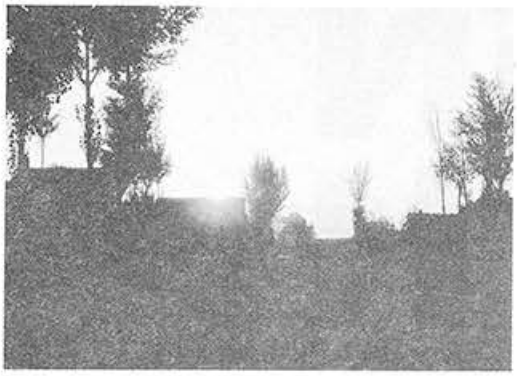


タイル張りの新しい校舎ができた。右上が旧校舎。（霊丘県下寨北小学校）

1994・10
30

夏のワーキングツアー日誌より

ヤオトンに泊まったり、早朝から作業したりとはじめてのことばかりだった今回のワーキングツアー。参加者の多くがはじめての中国、それも対外未開放の農村地帯。毎日交替でつけた記録には率直な感想がつづられています。ここで一部をご紹介しましょう。



徐町郷の朝陽。一日のはじまりだ

○北京駅の雑踏

北京駅に着いた。半裸の人びとが広場を埋めつくしている。駅構内でも、座ったり寝ころがっている人びとで足のふみ場もないくらいである。1週間もここでこんな風に列車を待つ人もあるとのこと（呉さん談）。あまりの人の多さに息をするのも苦しく感じられた。何度か中国に来て、平頂山での日本軍の蛮行や秦の始皇帝の兵馬俑など色々なものにショックを受けたが、この北京駅の群衆は一番のショックである。（7／25、前川 宏）

やっと列車に乗り込む事となった。改札前には人・人・人の集団、みんなどこに行くのだろう。こんなに多くの人びとが列車で移動するのは何故？中国のエネルギー？　パワー？　ただ人が多いから？　こんな情景は毎日続いているのだろう。この人びとを横目に列車に乗り込む。寝台車は、4人1室、ガイドを含めて16名4室に分乗する。（7／25、小白方 信雄）

○天鎮県交流会

交流会では、我々のためにプロが来ていたのにはビックリしたが、可愛い女の子たちにはニッコリ。出演料等の負担（もちろん県持ちであろうが）を心配したが、すぐ忘れ、中国の踊り、歌、そーらん節、フィナーレでは日中の人たちが入り乱れ、手をつなぎ、考えもしなかった楽しいひとときを過ごす。楽しい1日だった。水を浴び、気持ち良く就寝。（7／26、下田 良二）

歓迎会は中国の人たちはプロをよんですごく上手な歌やおどりを見せてくれたのに、日本の方は簡単なことしかしなかったのですまない気がした。でも楽しかった。すごくきれいな人たちといっしょに写真をとった！（7／26、中西 あかね）

○中国農村初体験

作業は、女の人は草むしりで、男の人は穴掘りでした。けっこう賈家屯郷の子供たちははずかしがりやで、近づくとすぐどっかへ行ってしまいました。

ニイハオと話しかけると、やっと笑顔が

（中略）希望果園を見ました。村の子供たちがいっしょについて来ました。みんなとてもひとなつこそうな子供たちでした。中原さんが折り紙を持っていて小さいツルなどを作りプレゼントをしました。（7／27、西原 淑恵）

食事の後、井戸を見にいった。川からわいているようだった。でも日本の沼のようにアイ色と深緑と混じった色。カメで沈澱させて、わかして、飲むそうだ。すごすぎる!!（7／27、三宅文子）

○ヤオトンに泊まる

ヤオトンはわりときれいだったけど、しけってすこし息苦しい。でもちょっとつかれているのであまり気にならないだろう。ろうそくと懐中電灯の光で書くのはけっこう大変で、昔の人は苦労したと感じた。（7／28、中西 あかね）

停電になり、ろうそくをともして食事を続ける。21時少し前より花火をはじめる。子どもたちも来ればいいのにと話していると、次の花火の時たくさん集まっているのが見えた。（中略）

かんじんの宿泊所、ヤオトンは未完成。工事中ながらも、ほぼできている部屋に急遽ベッド、ふとんを運び込み、宿泊の準備をしてくれた。コンクリート（？）くさく、少々湿気ているが、明日の朝は早いことだし、もう寝ます。（7／28、東川 貴子）

○早朝の作業

朝5時起床。6時ごろ、西留郷の苗場へ作業に。“苗場は裏庭にある”と言われたので、ほんの近くと思ってついていったのだが…歩くこと30～40分、往復5km。中国の裏庭は広～いんだ！

作業は、アンズの苗のまわりの土起こし。小白方さんの作業の速さに感心。とても、ついていけない。アンズの苗は、90cmぐらいに育っていた。何千本という苗木が、1本ずつつぎ木をされていたのには、びっくり。大変な作業だったろう。（7／29、前川 恒子）

子どもたちに折り鶴をプレゼントする

○歴史にふれる

バスで恒山、懸空寺へ。北魏の時代、約1500年前に建てられ、何度かの地震にもあったが修復され現在にいたっている。きりたつ岩はだにはりつくように黄色にみどりのふちどりをしたこの

寺院独特のかわらと木造り、極彩色豊かなつくり。この時代には豊かな森林があったことだろう。今は岩はだのみえるはげ山なのに。建物の低いところで27m、高いところで57m。澄みきった青い空が印象的。(7／29、植田 稔子)

○龍山(りゅうざん)に登る

ジープはゆれる。ほんとうにゆれる。何度も頭を打ちパーになると困ると思いながら思いっきりシェイクされていた。土ぼこりもすごいが、同乗していた前川さんご夫婦が分乗しておいた方がよかったかな？という程の悪路を行くこと3時間、昼食地点に到着する。(中略)

食べた後で龍山の頂上を目指すが、先程の草原と同じ位、花々が咲き乱れていて、歩くたびに踏みそうになって大変だった。

レンゲ草のようなもの、リンドウのようなもの、黄金色のタンポポ、行けども行けども続いている。きっと今がベストシーズンなんだろう。(7／30、中原 由美)

ひとつ山越え、ふたつ、みっつ、いいかげんアゴが上がる頃、リンドウ、笹リンドウの広がる山頂到着。360度、絶景かな、絶景かな！山頂2266m近くにも燕麦、菜の花の畑が広がる。山の北面にカラ松がまばらな林をつくっていて南面にはほとんど木がないというのは感覚的にどうもおかしな感じである。天然林と聞いているが、どうもか弱い林という印象を受ける。しかも山頂近くにも数戸の村がいくつか在り、天に到る畑を耕しており、これ以上どの様に緑化が進展するのだろう。(7／30、鞍田 悦子)

○豊かになるということ

この県（編集部注：渾源(こんげん)県）は、農村はともかく、県城の変わりようは激しい。新しい建物も次々に建っている。李山田県長に、なにがその原動力か聞いたところ、鉱業と観光をあげていた。鉱業は石炭が主で、ほかに大理石、花崗岩があるそうだ。石材は日本へ輸出しているという。

でも、豊かになるということには「副作用」をともなう。カネがからむと、なにか素朴なよさがなくなっていくような気がする。わずか3年足らずなのに、ちょっと悲しいな。(7／31、高見 邦雄)

夕食後は、2つのグループに分かれて農家を訪問した。2軒の家へ行ったが、どちらの家にもテレビ、扇風機があり、部屋も広かった。こちらからの質問とともに、村の人から日本の生活についての質問もあった。スイカ1個2000円という物価の高さに、集まった人たちは目を丸くしていた。

帰り道は、すっかり暗くなって満天の星を見ながら、“プラネタリウムみたい”と言いながら帰った。人工のものしか知らない都会人は悲しいなと思った。(7／31、中野 紀子)

龍山には、高山植物が咲き乱れていた（写真上）
2266mの山頂近くまで広がる菜の花畑（写真下）

○中日囲碁対局

これはもちろん、日程にはない。うれしいハプニングであった。相手は、食べる、飲む、寝る天才とみていたJ.ミン氏。優勢のうちに昼食時間。氏は食後打ちつづけようというジェスチャー。とどめはいつでもうてる、とばかり、ニコニコして、OK。(中略)

J.ミン氏。一転、中国流大人に変身。盤面を茫洋と眺めて岩のように動かない。時間を気にする気配もない。優勢にある私は、むしろその方を観察。昼のぬるいビールの心地よい酔いも加わって、思いがけぬ自慢話が増えたわい、とばかりニヤニヤ。瞬間、大石のからめ取られているのに気付く。酒ッ気の抜けていくのが分かる。氏の日本語を解せぬのをいいことに、言いたいことを言ってまぎらす。「猪八戒にやられたァー」氏は耳を動かし大笑で応えてくれた。(8／1、平川 進)

○農村体験ツアーでした

今回の旅は緑化協力などという大げさな名より、農村体験ツアーだと思った。観光だけじゃ絶対分からない中国が見れた。満足。体調をくずす人はやっぱり多かった。私は生理的にヤオトンのトイレがうけつけなかったが、あそこで毎日すごすことを考えると慣れの問題だろうか。(中略) 途中は、旅行にうんざりもした。「中国人」ときくと、農村でリンゴくれたおばさんや、ケンミンさん、サイさん、リーさんたちを思いうかべる。中国に対するイメージがより現実的になった。行きの北京駅で寝ころがる人びとや、大同駅で5元であんな重い荷物を運んでくれた人たちも忘れられない。でも中国人ときいて、いい思い出がよみがえってくるとは、幸せなことだ。(中略) 木を植えるのがあんなに大変だとはしらなかった。何十年もかけてやっと木らしくなる程、成長が遅い。

私の結論としては、部活づくめの生活から、異次元の世界へ入って、知らないことや初めてのことばかり経験できて、メンバーもよくて、おわってみるととても有意義な11日間でした。めでたし、めでたし!! (8／4、三宅 文子)

全文をまとめた文集を作りました。ご希望の方は1冊200円＋郵送料1冊分190円（2～5冊まで270円）を切手で同封の上、住所、氏名、電話番号を明記して郵送でGEN事務所まで。

楽しかったアイヌモシリ 二風谷ワーキングツアー

団長　松山 五郎

『本当にみんな来るのかなあ』と少々不安もよぎる。8月18日午後3時30分。北海道富良野駅待合室に集まった9名。二風谷ワーキングツアー全員である。ほとんどの者がおたがいに初対面の、ただ信頼だけで集まったメンバーである。年齢は22歳から65歳まで、職業も主婦あり会社員あり教師・職人・退職者とさまざま、自己紹介してみるとそれぞれに個性豊かでバラエティーに富んだツアーとなった。

翌19日、東大演習林では、クマゲラ博士で高名な有澤先生のご案内で原生林へ。そこに悠久の森の歴史の中に存る今を見せていただいた。有澤先生のすばらしい人間性に触れることができた。（中略）

倒木更新の説明をする有澤浩氏（左端）

二風谷ではチプサンケ（舟のまつり）に参加、博物館見学、木彫り実習、農作業体験等をとおしてアイヌ民族文化に触れるとともに、この里に住む人たちの温かさを感じた。（中略）

22日には半日をかけて山歩きをした。（中略）尾根づたいに歩いて2時間、突然目の前が開けた。そこで目にしたもの、それは木の無い山だった。山肌を削って作られた林道が山腹を這い回り、その道を通って木達は連れ去られたのであろう。森を愛した故貝澤正さんの深い遺志に思いを馳せた。

このたびのワーキングツアーは北海道の森林回復をテーマに企画した。実地に山を歩くことをとおして人間による自然破壊のようすを肌で感じ、目標の正しさ重要さを確認できた。今後取組もうとするナショナル・トラスト運動の強い支えとなるだろう。（中略）

23日昼過ぎ、全員大過もなく解散できたことは何よりの喜びであった。団を快く受け入れていただいた地元の各位、特に貝澤耕一さんご一家には大変なご迷惑とお世話をかけ、心よりお詫びとお礼を申し上げたい。（後略）

石田 礼子

新聞の小さな案内が目に留まり、何となしにこのツアーに申し込んだ。ナショナル・トラストの主旨も、アイヌのことも知らない。今にして思えば、こんないい加減な団員は私ぐらいのものだろう。それほど、私は無知であった。だから、現地に着いて他の団員の方々とお会いした時は、正直言ってとてもあせった。私などが参加してもいいのだろうかと。しかし、5日の間でさまざまな活動をしているうちに、逆に私のような者こそ積極的に参加し、何かを学ぶべき機会なのだと思うようになった。現に、私にとってまさにあらゆることを吸収する5日間であった。

書き出せばきりがないが、特に東大演習林を見学したこと、貝澤さんの山に登ったことは、貴重な体験であった。（中略）森のなかはひっそりと静まり返っているのに、足下では倒木がそのまま土にかえり、次の生命の息吹を待っている。「木々たちは何百年もじっとそこにたたずんで、人間を見つめているのか……」と思ったとき、私たちのたてる音しか聞こえないその混沌とした静寂の森が、とてつもなく迫力ある空間として感じられた。山にはパワーがある。そして、どこか人間が侵してはならない『聖域』を感じさせる神聖さがある。

勝手な都合で傍若無人に山を切り崩してきた人間の愚かさ、浅はかさを痛感せずにはいられなかった。「あの山を200年切るな」という故貝澤正さんの言葉が、私の胸にも響いてきた。（中略）自分たちに必要な分だけを取って、あとは残しておくというような、アイヌの人びとの昔からの精神を見習いたい。きっとこれからだって、私たちに出来ることはたくさんあるはずだから。（後略）

池田 昭男

人生の2～3倍もの年月を費やしての倒木更新。人間が手を貸さない、いや手を出さない自然林。そこで育まれる動物、植物の生きざまを目の前にして、人間が自然から、そして地球から得ることの絶大なるものを教わり、感謝しながら、他方で人間からお返しするものがいかに小さいかを思い知らされた東大演習林での野外授業でした。（中略）緑の大切さが言葉だけでなく、

丸木舟。ひっくり返らなくてよかった

体で感じられるこの体験を多くの人びとに知ってもらいたいと願わずにはいられません。（後略）

広瀬 綾子

楽しかったこのツアーを振り返ってみて、“自分はまだまだ知らないことがたくさんある”ということがわかった。1日目の東大演習林に入ったとき、原生林と人工林の区別もつかないような自分。有澤氏の説明を聞きながら広大な林の中をみて廻ったときのあの何とも言えないすがすがしさと不思議な気持。一生忘れられない思い出になりました。（中略）

二泊した二風谷荘の前で

また、高野さんに彫刻を教えていただいたときは自分の不器用さに呆れ果てましたが、できあがった作品は自分にとっては大事な思い出の一つです。（中略）

それから何といっても2日目から最終日までずっと二風谷にいて、チプサンケ（舟下ろし）の前夜祭から祭りが終わって潮が引くように観光客がすーっといなくなったあの静けさ。二風谷の2つの面を見られたのもこのツアー独特のものだと思います。（中略）

また二風谷に行くぞ！と決心を固めながら筆を置きます。（後略）

平川 進

（前略）あえて、印象に残ることを2、3あげてみます。（中略）

2．二風谷の山歩きとシケレベッ沢下り。けもの道を登り歩いて約2時間。忽然と現れた皆伐の一区画、眼下の丸裸の空間に手を向けて、「これを見てもらいたくて、ここまで…」と貝澤耕一氏。三井（資本）のやり方、それに連なる官僚、政治。単純化された図式をみるように、よく解る。「保安林とは、補助金とは」と説明する、というよりも話をしてくれる飾らない耕一氏の人柄にも接することが出来ました。まさにフィールド・ワーク。（中略）

4．多くの人と酒を飲んで歓談したこと。なかでも、耕一氏との一場面。「まてよ、今大事なことを聞いているような気がする。ちょっと書いてよ」と私は酒の勢いで。今、私の手帳に、「他人を　認める　94・8・22　耕一」とある。鉛筆だが筆圧の強い、飾らない書体。氏は酒に飲まれることのない人物でもあったのだ。（後略）

清水 美帆

（前略）ここ2、3年、勧めの方が大変忙しかったので、今回はのんびりと骨休めをしたいと思っていました。しかし、現地の人びとの生の声を聞いたとき、私自身の生き方を問われたようで、強い衝撃を受けました。

一和人として何をすべきなのか、また、何ができるのか、ということを考えさせられました。異民族・異文化を互いに認め合うこと。こんな簡単なことがなぜできないのでしょうか。少数民族・先住民族としてのアイヌ人を正式に認めること。アイヌ人としての基本的人権を保障し、アイデンティティーを確立すること。この目標をめざして、日本政府が正式に謝罪し正式に認めるまで、少なくともここ10年間を一応のめどとして、草の根の市民運動にかかわる一人として、二風谷の人びとと交流していきたいと思っています。

カムイノミする貝澤耕一さん

また、旅の間5日間毎朝、松山先生から太極拳の手ほどきを受け、心が非常に落ち着きました。せかせかした日常の歩みとは違う、ゆったりとした時間の流れ。それは、己の気持ち次第で調節できるということです。太極拳との出会いもまた有益でした。（中略）

また、1度だけ2時間半ほど、貝澤さんのとうきび畑で、土床のビニールはぎの作業をしました。これも足と体がしんどかったです。この作業をしたお陰で、あのおいしいとうきび1本を作るのにも大変な人手のかかっていることが想像できました。（後略）

渡辺 継

（前略）環境サミットなどで言われた持続可能な利用（サスティナブル・ユージング）は、環境問題にとりくむこれまでの考え方やその反省などから生まれた考えだと思います。それはまさしくアイヌの人びとの伝統的な生活のしかたです。しかしよく考えれば、アイヌ以外の日本人もかつて自然と密接に関わりながら暮らしていたときは、自然と共に生きていたのではないでしょうか。今の暮らしの中で、自然と共存できる生き方は、では具体的にどうなのかはわからず、難しい所です。

アイヌの人びととの関わり方でもそうです。（中略）和人（シャモ）がアイヌに対してしてきたことを、『年貢のつもりで』つぐなう、という萱野氏の言葉や、それに共感する人びとの思いはすばらしいのですが、やり方が良くないとまた新たな問題を生みかねない気がしてなりません。アイヌに対して人びとがやらなければならないことは、人が人と接するときの“当然のこと”のはずなのに…。これからどうやっていくか、まだまだ自分の中ではっきりと形にはなっていませんが、これからゆっくりと答えを出してゆきたいと思います。

佐藤 奈美子

（前略）ふだん子供たちに昔話を語っていて、アイヌの昔話、その世界観に心ひかれていた矢先だった。（中略）

二風谷で自然林、植樹林、伐採で放置されたままの山を同時に目にしたときには、私たちの生き方の選択を迫られているような気がしてならなかった。必要なものを必要なだけもらって自然と共に生きていく。そういうアイヌの世界に近代文明は泥足で踏みこんだ。そして今もなお。沙流川の美しい流れを長いダムがピシャッと塞ぎ、その異様を日に日に高くしていた。子孫に大地を返すとき、このダムは本当に必要なものなのだろうか。（後略）

武田 繁典

（前略）　私たちはいま出発したばかりだと思います。9人の参加者や、今回は参加できなかったけれども志のある人が、これからも参加し、体験し、交流し、学び考え、行動していくことで道ができていくと思います。今回のツアーはそういう意味でも素晴らしい第一歩になったと大変嬉しい気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。（後略）

参加者の感想文を抜粋してまとめました。全文の感想文集と記録日誌ができています。希望者は事務局まで問い合わせてください。

黄土高原の緑化協力・94年秋の進展

大同市で地球環境林会議

「地球環境林建設94－95年会議」が、大同市各県の青年団幹部など30数名の参加のもとに、9月19日、大同市渾源県で開催されました。まもなく整地作業のはじまる94年度計画の最終確認と95年度計画の立案を目的に「緑色地球網絡大同事務所」の主催で開かれたもので、緑の地球ネットワークからも竹中隆さんと高見世話人が出席しました。

参加者たちは前夜から会場に泊まり込み、朝8時から会議がはじまりました。94年度の協力プロジェクトはすでに26項目が決まっており、その範囲は1区9県と大同市のほぼ全域に広がっています。従来から協力のすすんでいる県からこれまでの実施状況と問題点が率直に語られ、新しく実施する県の人たちも熱心に耳を傾けました。

こちらからは日本での協力の広がりなどを報告し、夏の専門家調査団の提案にもとづくいくつかの新しい試みに協力を要請しました。

この秋から大同市南郊区に「地球環境林センター」が着工されることになり、これまでのプロジェクトを結びつけることになります。

緑化協力資金贈呈式

94年度の黄土高原における緑化協力資金を現地に届け、各地の進行状況を確認するために、高見世話人など2名が中国山西省を訪れました。

9月15日、太原の山西省人民政府で協力資金の贈呈式があり、この間に会員と協力者から寄せられた寄付、郵政省国際ボランティア貯金、地球環境基金の助成金など80万元（日本円約950万円）を、山西省の王文学副省長に手渡しました。そのもようは夜のＴＶニュースと翌日の山西日報で報道されました。

その後、霊丘県、渾源県で進行状況を確認しました。ことしの夏は例年にくらべて雨が多く、この春植えた苗木はわりと順調に生育しています。

北京では日本大使館や進出企業の事務所などを訪ね、協力事業の実情を伝えて協力を訴えてきました。それぞれ予期した以上の反応があり、心強く感じました。

新校舎ができました

霊丘県上寨鎮下寨北村は太行山脈のなかにある、1人あたり年収200元（1元＝12円）以下の貧しい村です。小学校付属果樹園づくりの最初のケースで、94年春のワーキングツアーが訪れ、村の人たちといっしょにリンゴを植えました。

小学校校舎は屋根が波うち、零下20度以下に下がるのに、窓の障子は破れ放題でした。

果樹園づくりの労賃をプールし、大同市の人たちが集めた「希望工程」の寄付金とあわせて、校舎を新築するとの話だったのですが、9月に行ってみると、タイル貼りのすてきな校舎ができあがっていました（表紙写真）。窓もガラスで、子どもたちは、ことしの冬は明るく温かい教室で勉強できると大喜びです。

果樹園づくりの副産物がさっそくこのようなかたちになって、私たちもたいへんうれしく思います。

使用済みテレカはどこへ行く？

たくさんのご協力をいただいている使用済みテレカの回収ですが、「どうやってお金になるの？」というお問い合わせをいただきました。変造カードの問題もあるため、換金以外の利用方法（後述）も検討中ですが、当面は次の方法で換金する予定でいます。

ヨーロッパなどの収集家の間ではデザインによっては1枚何千円という値段がついているそうですが、日本の古銭・古切手商などをつうじてマーケットに出ます。古銭・古切手商などでは、1枚10～20円で買い取っています。

一部の方がお送り下さっている古切手ですが、こちらは特に換金のめどがあるわけではありません。特に普通切手や新しい記念切手については、市場価値も少ないということで、次のような利用方法を考えています。

めざましい経済発展が伝えられる中国沿海部でも、就学困難児の支援のための「希望工程」などによって、いまだに貧しい生活を強いられている奥地の様子が知らされ、支援の輪が広がりはじめています。「国境を越えた」協力を続けてきたＧＥＮにとっても、これはうれしい動きです。そこでＧＥＮの協力地に支援をしてくれた中国在住の中国人の方への「記念品」として、「日本の切手」や「日本のテレホンカード」をプレゼントし、さらなる支援につなげようと、太原・大同のスタッフと検討をはじめました。また、現地の経済情況によっては販売して苗木代にあてることも考えられます。

上記はまだ決定したわけではありませんが、将来そういう利用をする場合もあるということで、ひとことお知らせしておきます。なお、現在寄せていただいている使用済みテレカ等については、換金して苗木代として使わせていただきます。用途が変わるときには、改めて会報でお知らせいたします。

パネル・スライドの活用を！

体育祭が終わると、文化祭のシーズンがやって来ます。例年、学校以外にもさまざまなところで展示していただいている「黄土高原に緑を！」のパネルの貸出しを、随時受け付け中です。枚数はスペースに応じて調整いたしますので、ご希望の方はお早めにお申込みください。また、スライドも用意しています。今年に入ってからの写真を中心にした新しい映像をご覧いただけます。講師の派遣にもできるかぎり応じますので、ご活用ください。お申込みはＧＥＮ事務所まで。

「黄土高原緑化調査団」の報告を聞いて

前川　宏（夏のワーキングツアー団員）

「むかし黄土高原には豊かな森林があり、気候も温暖で湿潤であった。しかし、人間がまる裸にしてしまった」と思っていたのですが、立花先生のお話を聞くと、ここは気温や降水量からみて「乾燥地ステップ気候」に属するので森林は無かったかもしれないとの事です。

私は平地で石などは無い方が緑化しやすく、高度が上がれば植林は困難になると考えていました。しかし立花先生のお話によると1500m以上の北斜面に木を植える方が良いだろうという事です。それは、気温が低いので水の蒸発が抑えられ、さらに土は痩せていても、砂礫が混じっていて通気性が良いからだそうです。

水面より草地、草地よりも樹木のほうが十倍程も水の蒸発量は多いとの事。

40人あまりが集まった

そのため乾燥地に木を植えることは水収支を考えると地域ではマイナスになる面もあるとの事です（コロラドのような雪解の地下水が多い所は別）。

これらの３点は私の常識を大きく変えるものでした。

小さな区域毎の雨量や気温を調べること、自然のままに放置しておき、どのような指標植物が育つか調べる生態学的な研究、有用な植物を集め育ててみる植物園の必要性などが現地で提言されました。これらの提言は早速、小中学校に百葉箱を設置する（20ほど）、細長く囲った実験区を設ける、「地球環境林センター」を設置し見本園を作るという様な形で具体化が進んでいるとの報告が高見さんよりありました。

本当に素早い対応です。

しかし、同じ調査団が昨年行き、同じ提言をしても昨年であれば受け入れられたかどうかは分からないそうです。活着率が悪く現地でも行き詰まりを感じていたところに色々とアドバイスがなされたのですんなりと受け入れられた面もあるようです。

こう考えると、困難も活着率の悪さもマイナスばかりではないのだなあと思われました。

空き缶募金箱をよろしく

前号に同封しました空き缶募金箱用のシール、ご活用いただいてますか？

デザインはいつもお世話になっている日本ビジネススクール専門学校デザイン科の学生さんに競作してもらった中から、下野慶幸さんの作品をもとにアレンジさせていただきました。

「廃品利用をテーマにした工作のために必要もない紙パック入りの牛乳を買ってくる」轍はふみたくないので、この募金箱のためだけに缶入り飲料を買っていただく必要はありません。ふだん缶入り飲料を飲まない方は、町の美化もかねて、道端に捨ててある空き缶を洗ってご使用くださいね。

店頭でご協力くださる場合は、ポップスタンド（Ａ５サイズ）を完成次第お送りしますので、ご連絡ください。

小学校付属果樹園に、気象観測のための百葉箱設置にと、協力はどんどん広がっています。いっそうのご協力をお願いいたします。

山西省の自然

石原忠一
（92年緑化協力団団長）

（２４）粟（谷子・小米）

少年の頃、農家の庭先きの狭い畑に、背丈ほどに伸びた粟が、重そうな太い黄色い穂を垂れていた光景がなつかしく眼にうかんできます。

日本最古の文献「古事記」に、女神の両耳から生えた粟の起源や、「日本書紀」の少彦名命が、粟柄によじ登って、弾かれて常世の郷に去った話、そして「正倉院文書」にのこる各国への租税の粟など、イネ渡来以前を想像してみました。

英語では、Fox-tail Millet と呼び、垂れた穂の様子が、中国の殷の時代の文字「𥝢」となり、ノギ扁になったといいますから、五穀（米・麦・黍・豆・粟）の内でも、小粒だが一番先輩格です。

この文章を書くため、熊本産と称する精白した糯粟を買ってきて調べてみたら１gr.当り約360粒もありました。

中国農業博物館刊行の「中国古代農業科技史」によりますと、7300年前の遺跡からの出土が報じられ、エノコロ

グサ（狗尾草）・別名ネコジャラシから直接馴化したもので、他の穀物に先立って生産され、今日でも、世界の90%が中国産、乾燥にも、痩せ地にも、塩害にも強く、よく貯蔵に耐えるとあります。

大阪名物の粟おこしは有名ですが、昨年、水平社・衡平社70周年の学術会議で晋州を訪ねたとき、釜山の市場でおなじみの粟おこしが店頭に山積みされているのをみて、ルーツはひとつと感じました。

山西省へ緑化基金を届けてきた高見君から、ゆく先々で、背の高いのや、ほんの30cmくらいしかないのに穂をつけたのやら、どんな旱地にも耐えて見事に実のっている粟に感動したしらせをうけました。

朝毎の粟粥がとってもよろしいとのことです。

地球村

ネットワーク『地球村』代表　高木 善之

1）はじめまして

こんにちは。『地球村』ってご存じですか。

『地球村』はモーリスストロング、レスターブラウンなど多くの人が提唱しているGlobal Community（地球共同体）のことで、永続可能な社会という意味です。

ネットワーク『地球村』は永続可能な社会の実現をめざして啓蒙や政策提言など提唱、シンクタンク活動をしているNGOです。（会員は現在800名）

2）きっかけ

13年前、交通事故に遭い長期入院、“人は幸せ（平和、自由、安心）を求めているのにどうして不幸（争いや破壊、苦しみや悲しみ）が絶えないのだろう”などいろんなことを考えました。その間に気付いたことがきっかけです。

現状の社会は競争社会で、みんなが幸せになれない仕組みになっている。学歴、就職、仕事、出世、お金、財産など…競争に勝って得られるのは一時的な幸福感。すぐに消えてしまうので、幸福感を持ち続けるには、次々により大きな競争を続けなければならない。

しかし競争からは本当の幸せ（平和、自由、安心）は得られない。

幸福感（周りとの比較から得られる一時的な満足感）と競争が悪循環となり、この悪循環を動かしているのが際限の無い成長をめざす現状の経済であることに気付きました。

現状の経済は残念ながら麻薬のようです。麻薬が中毒者を殺すように、拡大経済も最後には地球全体を滅ぼすでしょう。「戦争や飢餓、貧困の無い平和な日本に生まれて良かった」と思っている私たちは実は、経済という名の戦争を戦い続けているのです。戦時中、平和を望みながら戦っていた多くの兵士と同じように。

3）ネットワーク『地球村』の活動

環境破壊の原因は限り無い経済成長をめざす現状の政治経済ですが、大量消費を続けている私たちがそれを支えているのです。

多くの人がそのことに気付き、ライフスタイル、意識や価値観を変え始めない限り、社会も企業も政治も変わりません。

多くの人が気付くにはどうすればいか。ここが私たちの出発点です。

グローバルフォーラム京都会議でアドバイザーをつとめた高木善之さん（中央）

【考え方】

◎非対立；抗議しない、要求をしない、断定しない、否定しない、きめつけない

◎謙　虚；よく聴く、受け止める、共に考える、待つ、主義主張をしない

【活動】

1．講演、講師の派遣（実績；年間200回）

2．エコリーダの育成（学習会；毎週水曜夜、ワークショップ；年4回）

3．情報発信（毎月ニューズレターの発行、テキスト、ビデオ作成など）

4．その他（行政提言、経営提言、環境大学設立準備など）

◆お問い合わせ

ネットワーク『地球村』事務局
〒542 大阪市中央区島之内1-14-14
TEL. 06-281-0309　FAX. 281-0321

自然と親しむ会

神戸市森林植物園で種あつめ

山西省での緑化協力の大きなポイントの一つに樹種の多様化があります。

恒山森林公園の「引種園」、大同の「地球環境林センター」で実験的に育てるために種あつめを企画しました。

●場所：神戸市立森林植物園
●日時：10月23日（日）朝9時20分
●集合：三宮そごう百貨店東側市バス乗り場
●参加費：大人500円、子供200円（バス代・入園料別、保険料含む）
●申込み：10月20日（木）までにGEN事務所へ
●小雨決行。当日のお問合せは朝8時までにTEL.0797-88-1350高見へ
●森林植物園の福本市好さんが案内と指導をしてくださいます。

GEN講演会

「日本の環境破壊と財政危機」

たとえば、「ゼネコン汚職」って、行政の問題だと思っていました。でも。

山を切り開いて道路を作る。ゴルフ場を作る。海を埋め立てて空港を作る。海辺を「開発」してリゾート地を作る。島々を結んで橋を作る。

なにかを壊していませんか？

長く環境問題を研究され、行政の内側からもこれらの問題をシャープにみてこられた河宮信郎さんに語っていただきます。

●講師：河宮信郎さん（中京大教授）
●日時：10月28日（金）18時30分～
●場所：弁天町市民学習センター（JR環状線・地下鉄中央線「弁天町」駅すぐ
●参加費：700円

自然ゆずのしおり

いつも季節の柑橘類をご紹介くださる高知の田中さんからゆずのたよりが届きました。

この自然ゆずは杉やひのきや雑木の山々に囲まれた標高100m位の北向きの段々畑で栽培しています。無農薬で肥料は鶏糞を使用していますので皮も安心して召し上がっていただけます。

●無農薬・有機栽培　自然ゆず
●2kg　箱詰（17～18個入）　1600円
送料別途（関西620円）
●出荷　10月25日～11月25日
●連絡先：田中隆一さん
〒552 高知県安芸郡東洋町甲の浦
TEL/FAX. 08872-9-2500

売上の一部を寄付していただいていますのでご注文の際は「ＧＥＮの紹介」とひとこと添えてください。

お知らせ：10月19日（水）、大阪メルパルクホール（JR・地下鉄「新大阪」駅）で、『国際ボランティア貯金シンポジウム』が開催されます。開場18時、開演18時30分、終演予定21時。どうぞご参加ください。